

# 頼朝が造った地上の極楽浄土 －発掘された永福寺跡－

福田 誠(鎌倉市教育委員会)

## 1. 浄土思想

### 時期

浄土思想の中でも末法思想の影響を色濃く受けている。末法とは釈迦の立教以来千年間（五百年説も）を正法<sup>しやうぽう</sup>、次の千年間を像法<sup>ぞうぽう</sup>、その後一万年間を末法と三期に分けて考え、釈迦の教えの仏法が末法において正しく行われなくなるという考えである。

日本では最澄が著したとされる『末法燈明記』の中で永承7年(1052)に末法の世に入ると説かれこの説が広まった。(釈迦の没年が紀元前544～紀元前386年と幅があり諸説ある。)この後法滅<sup>ぽうめつ</sup>（仏の教えすらなくなる時代）が五十六億七千万年続き、人々を救済する仏として弥勒が現れると信じられ、経典を残すために経塚が築かれるようになる。

浄土世界は諸仏によりいくつも存在するが、阿弥陀の浄土である西方極楽浄土は、阿弥陀仏の慈悲により衆生を救済するために造られた世界である。末法思想の広がりとともに、主に浄土は西方極楽浄土を指すようになる。

### 仏の浄土

清浄で清涼な世界を指す言葉である。

阿弥陀如来(西方極楽浄土)、薬師如来(東方浄瑠璃浄土)、釈迦如来(靈山浄土)

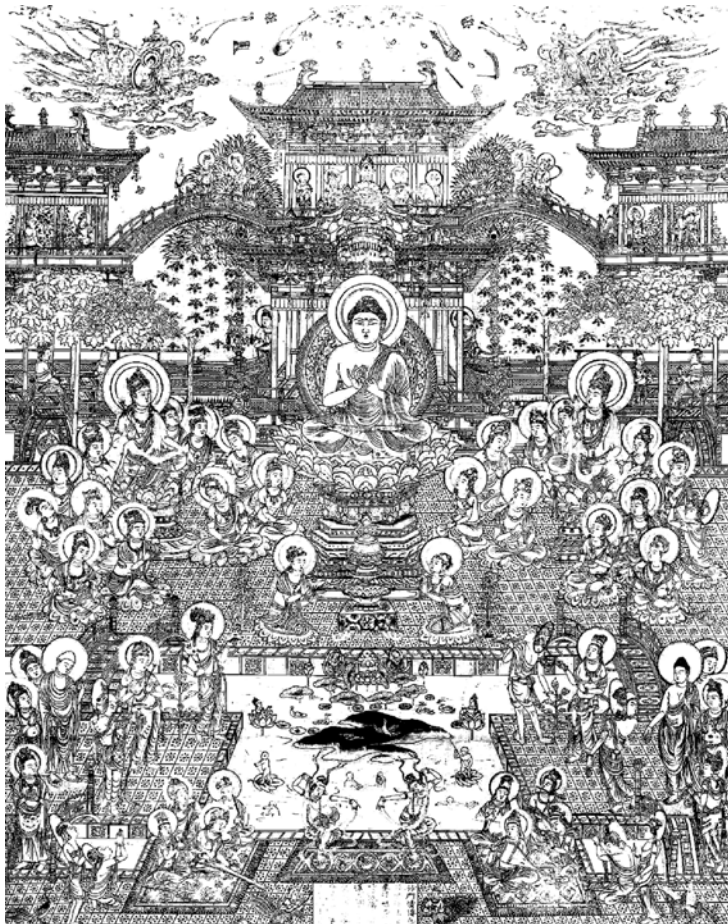
大日如来(密厳国土)、観音菩薩(補陀落浄土)

## 2. 極楽世界

往生するために極楽世界をひたすら観想する必要から浄土変相図が造られた。描かれた極楽世界は、中央の入母屋造りの仏殿と両脇殿の前に阿弥陀が座し、その前面にプールのような宝池に蓮や鳥が描かれている。仏殿を中心に全体が左右対称に描かれる極楽世界を具現化した、藤原道長の法成寺<sup>ぽうじやうじ</sup>や藤原頼通の平等院鳳凰堂が建立されていった。

### 堂の建立

藤原道長は晩年浄土信仰に傾倒し、無量寿院(後の法成寺)の建立を発願した。万寿4年(1027)、死に臨んで堂内の阿弥陀仏と自分を糸で結び往生したと伝えられる。藤原頼通が、父道長の宇治殿を阿弥陀如来を本尊とする平等院鳳凰堂に変えたのは、末法初年の永承7年(1052)であった。この後貴族たちも阿弥陀の救済を願い、持仏堂の建立が盛んになっていった。



京都聖光寺清海曼陀羅(部分イラスト)

### 3. 浄土庭園の誕生

浄土変相図に描かれた宝池は中国庭園を思わせるもので、後に貴族の邸宅内の自然の風景を取り入れた寝殿造りの庭園と結びついていくことになる。

この浄土庭園を一言で言うならば、「仏教の浄土思想を基に末法思想の影響を受け、平安時代中期以降に盛んに造られた池庭の形式で、仏堂と一体になり浄土の荘厳を示すために堂前に造られた園池」といえる。

### 4. 寝殿造庭園

「貴族の住宅である寝殿造に伴う庭園」のことで、儀式と宴遊の庭(場)といった役割があつ

た。そのために眺望と地形が重要視され、海浜や山、川など自然の様子を州浜・築山・遣水などに写し、周囲の眺望を借景として取り込んだ庭造りが盛んに行われた。

明日香村で発見された蘇我馬子の島ノ庄庭園と考えられている池の形は、川石を垂直に積んだ方形の中国風のものであった。

※飛鳥時代の大庭園跡(天武天皇(在位673~686年)らが遊んだという庭園。)奈良県明日香村の飛鳥京跡苑池(国史跡・名勝、7世紀後半)、南北二つの池のうち、北池の北東角にあたる護岸が出土。北池の規模は最大で南北54m、東西36mで、直線的な護岸を持つ形状が判明。日本書紀に「白錦後苑(しらにしきのみその)」と書かれている。

発見された北池の護岸は、北岸が5.3m、東岸が9.6m。20~30cm大の石を高さ約1m積み上げていた。階段状になっていた東側の一部は崩れていた。この護岸は直線的で、曲線で扇状の南池の形とは対照的。(県立橿原考古学研究所 2011/02/02 読売新聞記事)

この後、平城京東院跡で発見された庭園(現在、復原されている)の池は、汀の形が緩い勾配の洲浜で造られ和風化していた。池底には径20cm程の玉石が敷かれていた。池の南側に高床の建物が建てられていた。

平安京、藤原頼通の高陽院は貴族邸宅の典型である。子の橘俊綱たちばなのとしつなは作庭家として名高く、「作庭記」をまとめたともいわれている。そして末法思想の影響のもと、寝殿造

内に建立された持仏堂と前面の自然を取り入れた華やかな庭園が、極楽浄土の仏殿と宝池に結びつき、寝殿造の庭園と浄土庭園が融合していく。

決定的に異なるのは、寝殿造庭園の主はあくまでも人(主人)で、建物側から見る儀礼がおこなわれた庭園と眺望(借景)が重要であった。浄土庭園の主は仏であり、人は池越しに庭園と仏殿といった現世の極楽浄土を見ることになる。

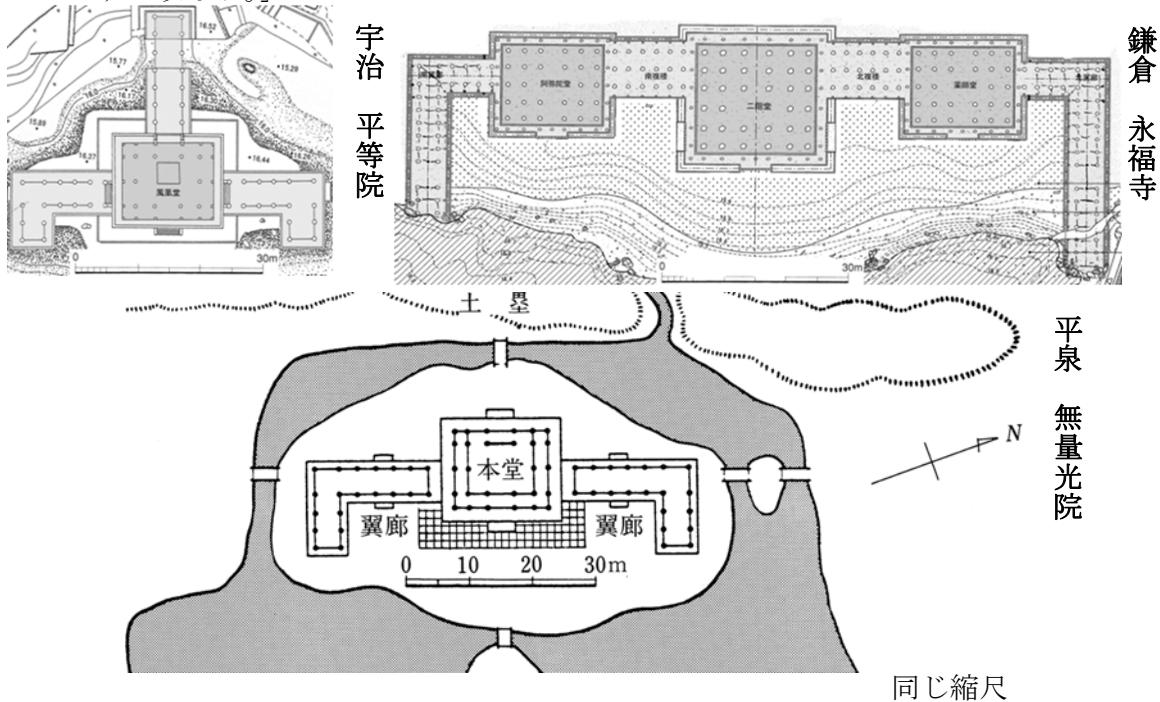
## 5. 永福寺

### 建立の理由

頼朝は文治5年(1189)7月19日、奥州に出発。義経を匿ったことを口実に平泉を攻めるが、かつて源頼義・義家が行った前九年役の日程になぞらえて計画がなされていたと考えられる。

これは源氏一番の戦功である源頼義、子義家が安倍氏を攻めた(前九年の役)征討軍の再現を基に、頼義・義家から義朝へと続く源家の存在を全国に示し、御家人の再編成を目指したものである。頼朝は頼義が康平5年(1062)9月17日に、厨川柵にて安倍貞任の首をはね晒した故実に合わせて自ら厨川柵まで出向き、文治5年(1189)9月6日に泰衡の首を晒している。全国から28万4千騎余もの軍勢を集結させたのも、武家の棟梁として御家人たちをまとめることを目指したものと云われている。永福寺の寛元・寶治(1245前後)年間修理に関する記事の中にこのことを表すような記述がある。

『吾妻鏡』寶治2年(1247)2月5日条「関東長久の遠慮を廻らしたまふ餘りに、怨霊を宥めんと欲す。義経といひ泰衡といひ、させる朝敵にあらざただ私の宿意をもって誅し亡ぼすが故なり。」



攻め滅ぼした藤原一族の怨霊を鎮めるためにも永福寺の建立は必要であり、自らの往生や親族の供養といった目的でなく、敵方将兵の供養を目的とした寺院が造られたのである。その姿形は中尊寺の大長寿院二階大堂を模したとされるが、長年に渡る発掘調査の結果、明らかになった全体形はむしろ平泉無量光院や宇治平等院に似ている。

### 『吾妻鏡』

- 文治5年(1189)12月9日 今日永福寺の事始なり。奥州において、泰衡管領の精舎を覧しめ、當寺花構の懇府を企てらる。かつは數萬の怨霊を宥め、かつは三有の苦果を救はんがためなり。そもそも梵閣等、宇を並ぶるの中に、二階大堂あり。専らこれを模せらるるによって、別して二階堂と號するか。
- 建久2年(1191)2月15日 晩に及びて、幕下大倉山の邊りを歴覽。精舎を建立せんがために、その靈地を得るためなり。
- 建久3年(1192)8月24日 二階堂の地に始めて池を掘る。地形もとより水木相應の所。
- 8月27日 將軍家、二階堂に行く。阿波阿闍梨静空の弟子静玄を召し、堂前の池の立石の事仰せ合はせらると云々。巖石數十果、所々より召し寄せられ、積みて高岡を成すと云々。
- 11月13日 二階堂の池の奇石の事。なほ御氣色を背く事等相交はるの間、静玄を召し、重ねてこれを直さる。畠山次郎・佐貫大夫・大井次郎、巖石を運ぶ。およそ三輩の勤め、すでに百人の功に同じ。御感再三に及ぶと云々。
- 11月20日 永福寺の榮作すでにその功を終ふ。雲軒月殿、絶妙比類なし。まことにこれ西土九品の莊嚴を東關二階の梵宇に遷すものか。
- 11月25日 今日、永福寺の供養なり。
- 建久10年(1199)1月13日 頼朝、没。
- 正治元年(1199)9月23日 頼家、御鞠。雨で中止、義盛第に相撲を覧る。
- 正治2年(1200)閏2月29日 頼家、永福寺以下勝地を遊覧。釣殿で酒盛、酩酊する。
- 建仁3年(1203)3月15日 今日、一切経会。舞を覧るために御出。烟霞<sup>えんか</sup>の眺望。櫻花の艶色、興あり感あり。
- 元久3年(1206)3月1日 永福寺より北壺に多くの桜・梅を移植す。
- 承元5年(1211)閏正月9日 永福寺の梅一本を御所北面に移植す。
- 建暦元年(1211)4月29日 実朝、郭公の声を聞くために永福寺に詣づ。
- 建保2年(1214)3月9日 実朝、永福寺で桜を賞す。

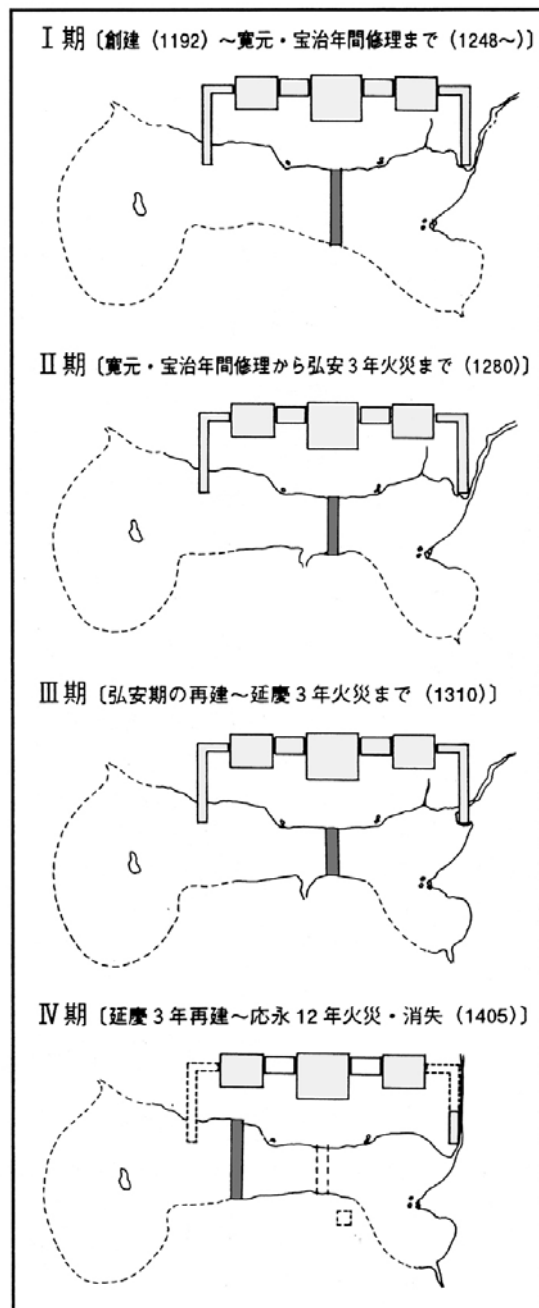
- 建保5年(1217)3月10日 実朝、永福寺で桜を観る。和歌の会。  
 12月25日 実朝、永福寺僧坊で終夜和歌の会。  
 26日 未明還御 御衣を僧坊に残し置き、歌一首を副える。  
 「春待ちて霞の袖にかさねよとしもの衣を置きてこそゆけ」
- 寛喜元年(1229)3月15日 <sup>よりつね</sup>頼経、永福寺で桜を覧る。  
 10月26日 頼経、永福寺で蹴鞠を覧る。和歌の会。
- 貞永元年(1232)11月29日 頼経、永福寺で雪見。釣殿で和歌の会。
- 建長3年(1251)3月10日 <sup>よりつぐ</sup>頼嗣、永福寺で花を覧る。
- 正元2年(1260)2月18日 <sup>むねたか</sup>宗尊、永福寺で桜を覧る。

『海道記』 十七、鎌倉遊覧 貞応2年(1223) 「日本古典全書」  
 「・・・(前略)次に東山のす所に望みて二階堂を禮す。これは餘堂にたくれきして感嘆および難し。第一第二、重なる櫓には、玉の瓦、鴛の翅を飛ばし、両目両足の並び給える臺には、金の盤、雁燈をかかげたり。おほかた、魯般、意匠を窮めて成風天の望にすずしく、毘首、手功を盡せり、發露、人の心に催ほす。見れば又、山に曲水あり庭に怪石あり。地形の勝れたる、仙室といひつべし。三壺に雲浮べり、七萬里の波、池邊によせ、五城に霞そばだてり、十二樓の風、階の上に吹く。誤りて半日の客たり、疑ふらくは七世の孫に逢わん事を・・・(後略)」

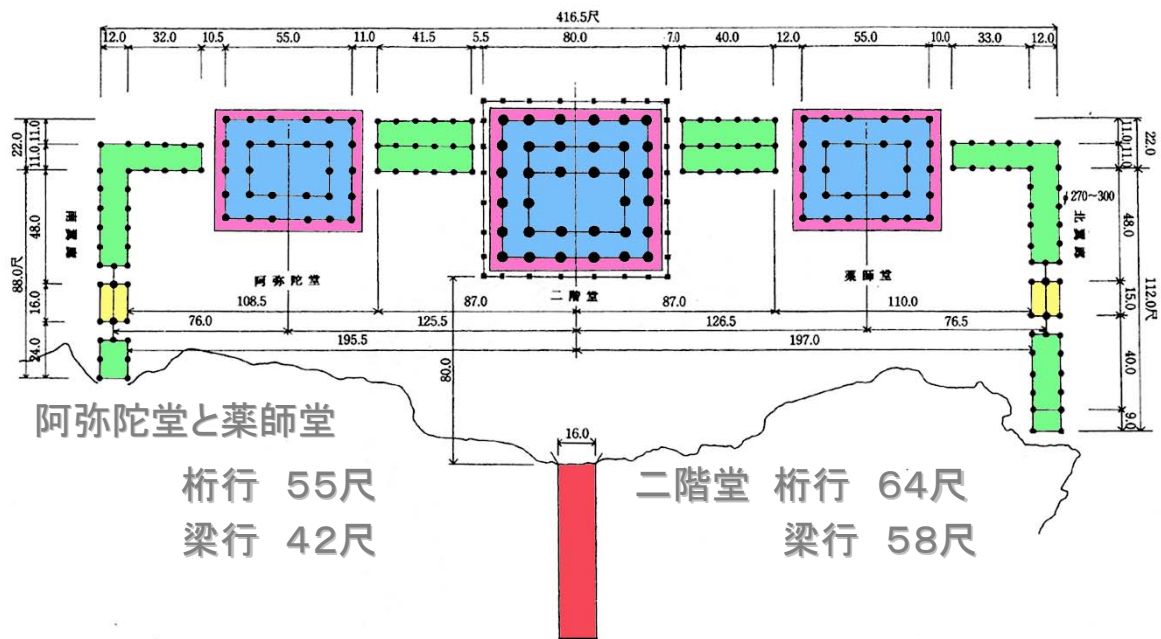
<sup>ぎよくりんえん</sup>『玉林苑』「続群書類従」第五百五十九  
 遊戯部九所収の早歌 鎌倉中末期に東国武士を中心に歌われた長編の歌謡

永福寺勝景

「忠臣國を治。おさめて雨露の恩忝く。六十六の境にそゝがしむ。そゝがざる草葉もなければ。藪しもわかず道しある。御世の



遺構の変遷模式図



政陰ず。法燈も光を善副。皇道ともに朗なり。一夢に時に合哉明德。々高仰は名にし負三笠山。彼右幕下家の草建。霊場樞押開て。その寺號を新たに訪へば。永福智圓滿の標示として。則建久の治天を撰しも。建久かるべき。未来を兼ねて示しけむ。然れば莊嚴何ぞ褒美の詞も及ばん。たとふるに外に撰難し。薨を守鳳の翅は。常に竹園にかける。徳化に續つゝ。猶し竹の谷までも。代々の葉風をや仰らん。幾度恵に榮ん。さても霊場を拜し奉れば。安養の聖容は無邊の光を垂。浄瑠璃醫王善逝。一代牟尼の尊像。諸聖衆みな各。因位の誓約に答えつゝ。過現の利益たのもしきぞや覺。寶池の水は瑠璃に透て。移る橋を見渡ば。珊瑚の薨玉の砂。汀の波に並よりて。鳧雁鴛鴦は羽を通して戯れ。苦空無我と轉る。風常樂の響きあれば。寶樹の梢に澄上る。そよや梓弓彌牟の比かとよ。廻雪の袂も華の匂ひにや移らん。閑き空の夕榮。糸竹の調の妙なるも。兜率の園に異ならず。夏山の茂時の鳥も。勝比谷にてや初音聞らん。納涼殊に便を得て。涼き風を松陰の。岩井の水をや結ぶなら。岸風に扇をも忘ぬべきは。先目にかゝる釣殿。歸さも更に急れず。晩涼の興を勸れば。いとこよなき砌なれや。」

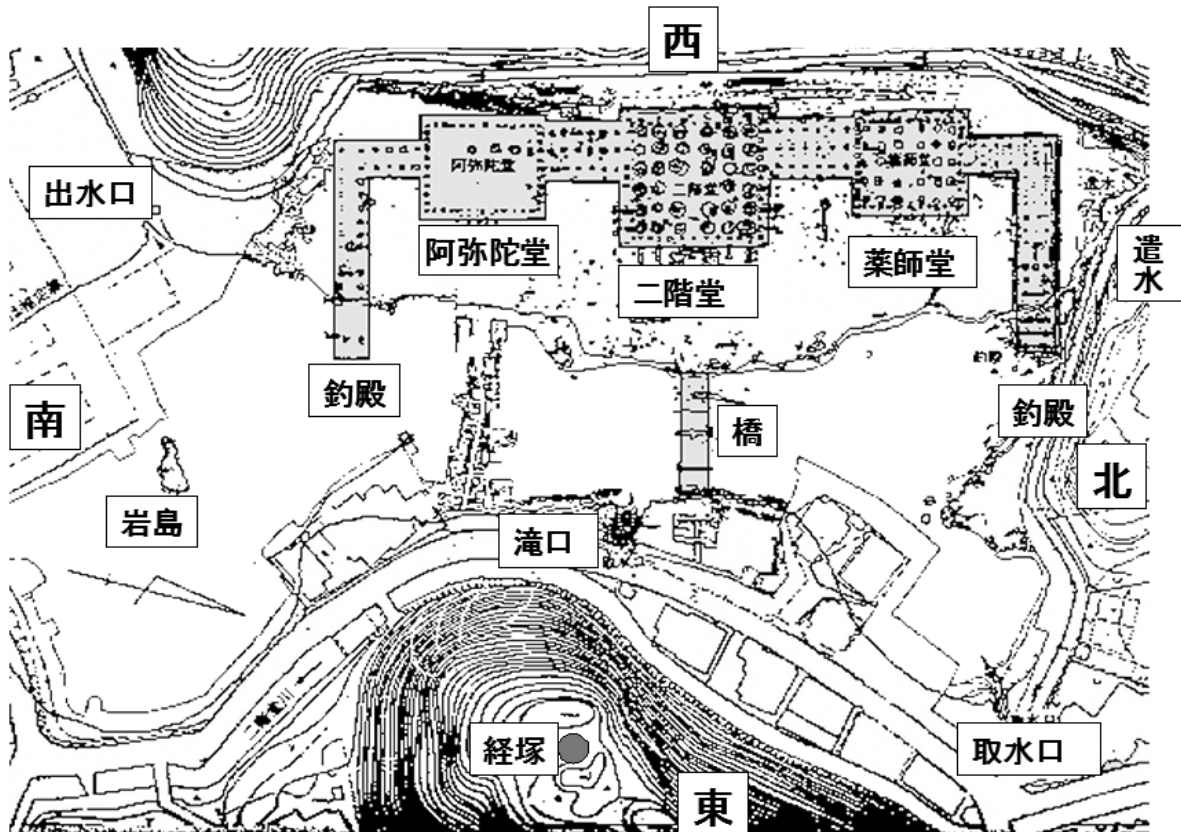
『東関紀行』 仁治3年(1242) 「日本古典全書」

「二階堂はことにすぐれたる寺なり。鳳の薨、日にかがやき、鳧の鐘、霜に響き、樓臺の莊嚴より始めて、林池のありとにいたるまで、殊に心にとまりて見ゆ。」

### 調査で明らかになった庭園

#### 苑池

南北約200m、東西約70m、中央部がくびれた瓢箪形の池。汀の基本形は洲浜で表現さ



永福寺の堂舎と庭園

れ、北岸・二階堂正面の西岸と東岸に景石が多用されている。大きく南に広がる池の中ほどに岩島が築かれている。北翼廊の奥、西ヶ谷に源を発する水路を引き込み遣水としている。

### 植栽

池中出土の花粉を分析することにより当時の植生が明らかにされた。

創建以前はスギ林、シイ・カシ林が優勢であった。創建期～Ⅱ期頃まではスギ林、照葉樹林、落葉広葉樹林が優勢。他にクロマツ、サクラ、モミジが検出されている。水生植物として浮葉植物や抽水植物のガマ、イネ科が見られた。

Ⅲ期・Ⅳ期にはスギ林、シイ・カシ林が減少しクロマツが優勢となる。池中では沈水植物や浮葉植物のヒシ、ガマが見られる。

15世紀以降、クロマツの他にイネ科花粉の急増と水田雑草の随伴が見られることから、急速に水田化が進んだことを示している。

### 華やかな空間

永福寺の境内には、中心の二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の他に、釣殿、多宝塔、鐘楼、惣門、南門、僧坊、別当坊などの建物があった。源頼朝が構想した浄土世界は、いくつかの画期を経て計画が具体化していったと考えられる。

1. 平治の乱が起きる14歳まで京都で生まれ育ち、この間に見聞した都の寺院や庭園。
2. 平治の乱の敗北、父義朝の死。自分だけ生き延びたこと。・伊豆へ流刑。

3. 平泉の荘厳な堂舎。滅ぼした藤原一族や弟義経の怨霊鎮護。・・・建立を立願。

4. 武家の棟梁として上洛、改めて見聞した都の寺院や庭園。・・・プランの修正。

頼朝が戦没者の供養を行い、怨霊を宥め鎮めるための目的で創建された永福寺で、建立から7年餘、頼朝が亡くなった建久10年(1199)1月13日から1年もたたないで遊びが始まる。頼朝自身が永福寺で遊んだ記録は見あたらないが、頼家、実朝をはじめ歴代将軍は永福寺で様々な遊び(蹴鞠・酒宴・花見・月見・和歌会)を行い、まさに怨霊を恐れていないが如くである。

地中に埋もれた永福寺の姿は長い間謎であった。発掘調査で明らかになったその姿は、東面する中央の二階堂を中心に両脇堂、更に脇堂から翼廊が延び先端に釣殿が付く左右対称の配置で、創建当初から翼廊、釣殿といった住宅建築の要素も併せ持っていた。

将軍家の権勢を誇示するための華やかな演出が、寺でありながら様々な遊びを行うことになる下地として、創建当初から織り込まれていたことになる。

東面する堂舎の前面に広がる庭園は、相模川河口の砂利を敷き詰めた州浜、海岸の岩や箱根溶岩を景石として据え、二階堂正面には橋が架けられていた。谷奥から引き込んだ遣水が釣殿脇から池に注ぎ込み、庭には梅・桜・松・楓・柳が植えられ、春には鳥の囀りが響き四季折々の草花が咲き乱れていた。その有様は橘俊綱が関わったとされる作庭記の内容を彷彿とさせるものであった。

### 作庭記と永福寺の比較(抜き出し)

作庭記	永福寺
・池は大海を基本に荒磯に白砂を所々に配するよう。	・池は洲浜を基本に荒磯風の石組みが造られる。相模湾の風景を写す。
・島を置くことは、所の有様に従い、池の広い狭いによるべし。	・二階堂正面に島は無く、南に大きく張り出した池中に設ける。
・水の流れは、東方よりいたして舎屋のしたを通して未申方へ出すことが、最吉なり。	・西ヶ谷からの流れを遣水とし、釣殿の右脇から池に注ぎ込ませている。Ⅲ期には建物の下を通してしている。
・水を流し下すに就いて、一尺につき三分、一丈につき三寸、十丈につき三尺下げたならば、水が滞りなくせせらぎ流れるのである。	・遣水流路は約35m、高低差は約1.1m。およそ100分3勾配で造られている。

### 文献に見える永福寺境内の建物

二階堂・阿弥陀堂・薬師堂・惣門・南門・多宝塔・橋・釣殿・僧坊(別当坊・亀ヶ淵坊・石井御坊・真言院・杉ヶ谷坊)



### 調査によって明らかにされた主要伽藍の配置

敷地の西側中央に二階堂を据え、北側に薬師堂、南側に阿弥陀堂を置く。各堂は複廊で繋がれ、薬師堂と阿弥陀堂からは池に向かい翼廊が付き、翼廊の先端には釣殿がある。堂の前面には南北に長い園池を配置、二階堂正面に長橋が架かる。東面する各堂を並べ廊下で繋げてしまう配置は、西を強く意識したものである。地形に制約されているのかもしれないが、庭園の有り様はまさに都の貴族の邸宅寝殿造りを写している様である。

### 三堂の大きさ

二階堂 桁行64尺×梁行58尺 (19.39m×17.57m)

阿弥陀堂・薬師堂 桁行55尺×梁行42尺 (16.70m×12.72m)

### 永福寺の本尊

二階堂	釈迦如来	靈山浄土	玉林苑「群書類従」(一代牟尼の尊像)
薬師堂	薬師如来	東方浄瑠璃浄土	吾妻鏡他
阿弥陀堂	阿弥陀如来	西方極楽浄土	吾妻鏡他

### 如来三尊像 (釈迦を中心に脇に薬師と阿弥陀)

現生仏の釈迦が引接し、浄瑠璃浄土から極楽浄土に渡す役割があるとされている。永福寺も怨霊鎮護のために、衆生の疾病を治癒して寿命を延べ、災禍を消去し、衣食などを満足せしめる薬師の力で宥め、恨みを持った霊(奥州藤原氏・弟義経)を現生仏である釈迦が現生利益の橋渡しをして速やかに阿弥陀の極楽浄土に往生させるためと考えられる。そのために、伽藍全体が東面し、西を強く意識した配置になったと考えられる。頼朝の存命中、永福寺では開堂供養の記事以外、仏事の記録が少ない。

頼朝の大倉御所の北東(鬼門)に作られた永福寺は、怨霊を閉じ込めた空間であった。頼家・實朝を始めとする後の将軍たちが境内で遊ぶのは、居心地の良い空間、この世でない空間、まさに永福寺は、頼朝が観想した極楽浄土と庭園の理想を具現化したものと言える。



臼杵磨崖仏ホキ第一群第二龕の「如来三尊像」



3DCGによる再現



AR (拡張現実)

実際の風景とCGを組み合わせる技術

### 補足解説

**浄土変相図** 極楽を観想するための絵 **苑池** 池泉を主体とした庭園 **洲浜** 海浜の砂浜の様子 **作庭記** 頼通の子、橘俊綱らによってまとめられた作庭指針の書 **使用された石材** 礎石は根府川上流の石、砂利は相模川河口の石、庭石は箱根の溶岩と葉山周辺の海岸の凝灰岩 **建物に使用された瓦** 主に埼玉県児玉郡美里周囲で焼かれた

### 参考文献

1. 『吾妻鏡』全譯吾妻鏡 1976 新人物往来社
2. 『鶴岡社務記録』史籍集覧 二五
3. 『北条九代記』続群書類従 第貳拾九輯 上雑部五
4. 『見聞私記』続群書類従 第参拾輯上 雑部二十五
5. 『梅松論』続群書類従 第貳拾輯 合戦部三
6. 『鎌倉大日記』神奈川県史編集第4集 1972 神奈川県企画調査部県史編集室
7. 『鎌倉殿中以下年中行事』群書類従第拾四輯 武家部九
8. 『海道記』新編日本古典文学全集四八 1994 小学館
9. 『東関紀行』新編日本古典文学全集四八 1994 小学館
10. 『春の深山路』新編日本古典文学全集四八 1994 小学館
11. 『玉林苑』(永福寺勝景・同砌并)続群書類従第拾九輯 遊戯部九
12. 『保暦間記』群書類従 第壹拾七輯 雑部十三
13. 『鎌倉廢寺事典』貫達人 川副武胤 1980 有隣堂
14. 『鎌倉市史社寺編』1972 吉川弘文館
15. 『永福寺跡』-遺構編- 2001.3 鎌倉市教育委員会
16. 『永福寺跡』-遺物・考察編- 2002.3 鎌倉市教育委員会
17. 『日本庭園史話』森蘊 1981 NHKブックス
18. 『作庭記の世界』森蘊 1986 NHKブックス